

人の心が動かす社会 地に足をつけ日本の精神史たどる

宗教学者・島藺進さん（人間発見）

人間発見

フォローする

2023年2月19日 5:00 [有料会員限定]

保存



1948年東京生まれ。金沢の高校から東大の理科3類に入学し宗教学に転じた。筑波大、東京外国語大、東大を経て2013年から上智大のグリーンケア研究所長。22年に退任し現在は東大名誉教授。

宗教学者の島藺進さんは社会学や歴史、哲学や文学など様々な学問に目配りし、幅広い視野から日本や世界の精神史への考察を深めてきた。さらに死生学や遺族へ寄り添うグリーンケアとの関わりを通じ、人々の生活の場からの血の通った視点も持ち合わせる。その目に今の世界はどう見えるのだろうか。

しばらく前まで、経済が発展すれば世界は民主化に向かうのだという共通の認識がありました。しかし、経済成長で問題を解決しようとする新自由主義が格差の拡大などによって限界をみせ、西欧発祥の様々な価値観が信頼されなくなりつつあります。価値観の揺らぎのはざまに中国やロシアなどの強権主義が台頭し、人類はかつて持っていた方向感覚を失っています。

哲学者カール・ヤスパースに倣って、紀元前の1000年紀を「軸の時代（Axial age）」と

らえることがあります。宗教や哲学など、その後2000年以上続く世界の精神文化の基盤がこの時期に現れました。啓蒙主義から始まる民主主義や自由主義もその延長にあるのですが、それらがいよいよ懐疑的に見られるなかで、世界は共通の新たな価値を模索する第二の軸の時代に入っているとみることもできます。

SDGs（国連の持続可能な開発目標）などに光明を見るという。

今は勝った者が偉いという覇権主義に様々なレベルで意識が傾いています。しかしその先に希望がないわけではない。SDGs、ノーベル平和賞や核兵器禁止条約などグローバルな市民社会の世論は存在しています。それは新しい「軸」を先取りするものなのかもしれない。人類社会はふらつきながらではあるが、前に進もうとしています。論理を超えた信仰を扱う宗教学の観点からは、そういうものが見えてきやすいところがあると思います。

「利他」が盛んに言われるようになってきたのも世界的な変化です。今の利他は成長で人々の不安をごまかせなくなるなかでの現実的な選択肢という性格を持っています。

社会起業家が増え、子ども食堂が広がるのもそう。地に足の着いたことがらを大事にしようという意識は、次の時代に向かう大きな世論と通じています。新型コロナウイルス禍の1年目に配られた10万円を寄付に使ったのは若い人が多かった。利他を唱える人もそうですが、そういう価値観は若い層で一定の支持を受けはじめました。

経済の分野では、事業に利他などの理念を問うて、また、ある種、孤独なところがある中小企業の経営者を集めて心のよりどころを授けてきた稲盛和夫さんは偉いと思います。いまはリスクを取ってもうけた者が威張る風潮ですが、次の軸は何かという観点から見ると、私は稲盛さんのほうが新しいと感じます。

学者のありようにも軸の模索は関係する。

1990年代には日韓の研究交流が盛んで私もその中にいた。中国も入り、日中韓の学术交流から世界に何か発信できるのではないかという希望があった時代です。これが今は、日本でいえば嫌中嫌韓といわれるような距離ができて、さらにコロナで学术交流にも障害が出ています。

今こそ世界の理念に独自の貢献をする発想が強まっていいはずなのです。節度を持ってお互いが譲り合える社会を構想していかななくてはいけない。理念不在の心の空白には、偏狭なナショナリズムが入り込みかねません。第二の軸の時代、新しい文明を作っていくこうというときに、従来支配的だった西洋の文明とは違う声を、アジアからも響かせていく意味は増えています。



若い頃は折口信夫の研究に取り組んだ

1967年に東大の理科3類に入学。ところが文学部に進み、宗教学を選んだ。

理3を目指したのは祖父も父も医者だったからです。伯父も東大の医学部長をしていた。しかし入ってみると医学の道は自分で選んだ気がしない。主体性がないと、ふがいなさを感じていました。

時代は騒然としていました。68年は学生反乱のパリ5月革命、東大では医学部紛争由来のバリケードストライキがあり、69年は安田講堂事件です。私はストライキ派で偉そうなことを言って自己正当化をしていましたが、翻って自分の内面を見つめると、実はそこには何も無い。焦りの思いにとりつかれたのです。

人間に近い学問をしたい気持ちがありました。臨床に熱心な精神科医だった父の影響があったと思います。しかし医学部には権威主義のようなものを感じ、曲折を経て選んだのが宗教学でした。フィールドワークがあり、書齋の学問ではないというのが一番の理由だったでしょうか。

宗教学の道に進み、結果的に正解だったと感じた。

縛りが少なく、とても居心地がよかった。なにより、道を見失った若者を歓迎する雰囲気がありました。学徒出陣した世代である先生方の戦争体験も影響していたと思います。そんなことで大学院まで行く気になりました。

大学の卒論はフロイトと宗教、院の修士論文は折口信夫の研究でした。当時東大にいた「『甘え』の構造」の土居健郎先生の影響が大きかったのですが、そうこうするうち、科学と宗教の間のようなことをやっていけばいいのかと方向感が見えてきました。

大学院を出て、研究員の職を得て筑波大へ。

折口信夫は民俗学者で国文学者。詩人で歌人で小説も書いた博覧強記の天才です。私は高校時代から国語が好きで、折口の世界にずいぶん親しみましたが、しかし折口をいくら研究し

でも折口が研究していた世界には近づかない。そこで天理教などの教祖研究に取り組みました。

19世紀後半の日本の農民の、苦難の経験や信仰の目覚め、深まりを、実感的に学ぼうとしたのです。自分の生き方を求めて学問をやる、実存的な志向がありました。

大学の紀要に論文を書くたびに、大本教の教祖である出口なおの研究書を書いていた一橋大の安丸良夫先生に送りました。面識もないのに若い私の論文を丁寧に読み、封書やはがきでポイントを突いた批評を返してくださったのはありがたく、思い返してその姿勢に頭が下がります。

この頃の先生方は無遠慮な若者を嫌がりもせず育てようとしていました。後に東京外国語大に移って30歳代の半ばで米国に留学し、ロバート・ベラーという著名な宗教社会学者に指導を受ける機会に恵まれたのも、周囲の先生方が勧めてくれたおかげです。

仲間の存在も大きかった。教祖研究をやっていた頃にいろいろな大学の若手研究者が集まって宗教社会学の研究会を作りました。舶来でない、日本の宗教のありように則した独自の理論を打ち出した画期的な連携でしたが、それ以上に、民俗史や宗教史など様々な分野の研究者たちと群れて、研究会や合宿、飲み会の議論で刺激を受けたことが財産です。私が大学教員としてコンパや合宿を重視するのはこの経験からきています。

学問への姿勢のベースには当時の社会背景もある。

宗教を否定し、また教条主義的なマルクス主義に、学生時代から限界を感じました。心を動かされたのは石牟礼道子の「苦海浄土」です。巡礼装束の水俣病の抗議運動に、現代文明の病を民衆文化が癒やしていくイマジネーションがありました。ロシアのソルジェニーツインの収容所文学を読みふけた時期もあります。20世紀の地獄を、きちんと見つめないといけないという意識が強かったのです。

五木寛之さんも好きでした。暗いところがあるし、若者に常に親切。文学部中退というのがいいですね。当時から今もそう思います。



研究仲間とスペインで（右が島藺さん）

1980年代は米国留学を経て、スピリチュアリティー（新しい霊性文化）の興隆に関心を深めた。

制度的な宗教が支持を失い、また物質文明にもむなしさを感じられるようになる中で、スピリチュアルなものへの関心が強まっています。米国は70年代、日本は80年代に広がった変化です。

インドやチベットの文化、非西欧的な未開文化などに人間の本当の姿や心のよりどころを求める傾向で、宗教学や社会学、文化人類学などの学問分野でもそこに希望を見て、自分たちの手で新しい精神文化を切り開いていこうとする論者が現れました。

私自身は当初、それは明るすぎると感じていました。今でもその感覚は変わりませんが、人々が制度的な宗教とは違う、何か大いなるものに触れることで自己を高めていこうとする傾向は明白であったので、研究の対象として注目し、本も書きました。

20世紀の最後の四半世紀に起こった、行き詰まりの感覚からくる精神の渴望感は歴史的にとっても重要なもので、一方では狂信的な宗教集団を生み、一方では穏やかなスピリチュアル文化を生んでいます。それは今の生活にも溶け込んでいて、「もののけ姫」や「ハリー・ポッター」が人気になったり、あるいは宮沢賢治の童話が根強く読まれていたりするのは、その文脈の中にあります。そこには悟りがあり、祈りがあります。

1995年の地下鉄サリン事件などのオウム真理教事件はそんな変化の中で起きた。

日本は新宗教が多い国柄ですが基本的には現世肯定的という特徴がありました。つまり、この世はそれほど悪くないがおかしなところもあるから自分たちが直すといったもので、例えば天理教の「陽気ぐらし」がそうです。それを神様が見て喜ぶ。

しかし、日本も70年代以降この世は悪だという西洋型の宗教が現れ、若者に広がっていた

絶望感に訴えるようになりました。この型の宗教はこの世から飛び出して向こうの世界へいくことを目標にします。家族を捨て、出家して個人がこの世と壁をつくる。自分たちだけの、精神的な優越性を感じる世界をつくるといったふうになっていきます。

オウム真理教もそうでした。世間と隔絶された独善的な小世界のなかで、たいした決断もなされることなく、地滑りのように暴力の坂を転がり落ちていった。オウムの持っていた攻撃性は、先行して勢力を持った旧統一教会の影響もあると思われ、研究の必要があると考えています。

宗教学にとってオウム事件は試練だった。

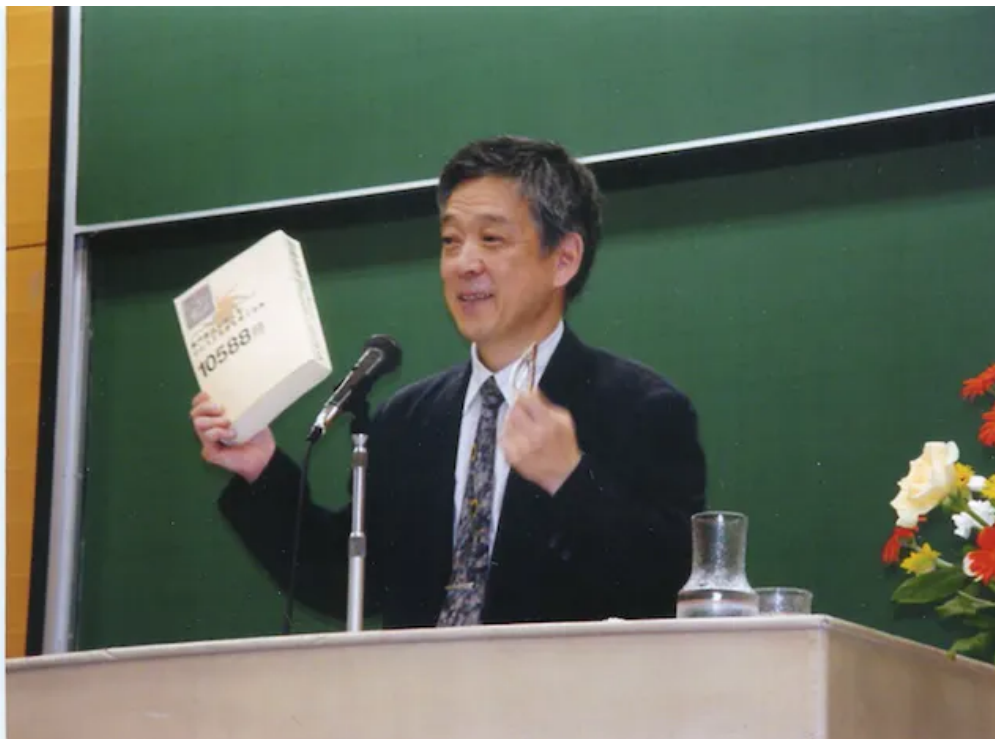
宗教学は文化人類学のようにフィールドワークをしてその場所に入り込まないと、研究対象が何なのかが見えにくい。それが研究の重要な手段なのですが、入り込んで書くと、文化人類学と違って、それを宗教側が利用するということが起きます。実際に宗教団体の側が、研究者を敵か味方かと識別して、向こうから近づいてくることも80年代くらいから起きていました。肩入れするような事例があり、オウム事件では宗教学がそれでたたかれました。

宗教学の研究者として、自身も立ち位置に迷う時期だったという。

宗教がすべて怪しい、反社会的なもののように見られるなかで、学問的な研究が、宣伝をしているように受けとられるようになりました。

オウム真理教や旧統一教会など、宗教には市民に危害を加えるものがありますが、もちろんそういうものばかりではありません。実地研究が非常にやりにくくなりました。

個人的には自分は何なのかということを考えました。ある宗教活動を評価するようなことを書いても、突き詰めると自分自身が何か信じているわけではない。横にいて研究者としてものを言っているだけで、当事者性が希薄なのです。若いときからある、自分の中には何もないという感覚が切実によみがえった時期でもありました。



大学での講義

2002年から死生学に関わり、研究に幅と深みを増す機会になった。

若い頃にやった教祖研究では、明治維新の頃の農民の精神の内面に迫ろうという意識がありました。理論だけではなく、人間に近い学問をしたい考えがあったからです。人々によって「生きられた宗教」を感じたかった。さらに、それで分かったことを現代の自分にどうつなげるか、ずっと模索していました。

小説家なら過去の人を題材にして、そこに自分を入れて書くこともできますが研究者はそうもいかない。教祖研究の後、文明比較をやったり宗教社会学理論に取り組んだりし、新宗教についても創価学会を勉強し、やがてオウム真理教をやり、現代の問題に取り組んだ。生命倫理の政府委員もやりました。領域を広げたことでいろんなことに口出しはできるようになりましたが、一方で自分自身の核はどうなのかという、空虚な感じは消えませんでした。

これに対して死生学は自分の問題として取り組みます。そのことが、人の生き方の根本に関わるような学問をやりたいかかった私にはとてもありがたかった。東大の文学部が新しい研究テーマを探すなかでたまたま関わった分野でしたが、運に恵まれたと思います。自分を含めた、人間に近いところに足場を持ち、一方で大きな枠組みや理論も考える。その頃に形ができた2本建ての学究生活は、私にとっても合っていると感じます。

死生学が機縁となり、13年に上智大学のグリーンケア研究所長に招かれた。

教祖研究で目指していたことに帰ってきた感覚がありました。市井の人たちの魂の痛みに近づく仕事です。そういう関心で人と話し本を読み、自分に照らして考えると、人はつらさや苦しき、悲しきを通じて、深い次元を見いだしていくのだと実感します。

グリーンケア研究所は大事な人との死別など、悲嘆に寄り添える人材を育てる場所です。50代くらいの、一通り人生経験を積み、第二の人生でこそできることをしたいと考える人

たちが多く集って理論や実践を学んでいます。それを勉強したから収入が増えるわけではない。人の役に立ち、それで自分も大切なことをしている感覚を持ちたいのです。そんな切実な気持ちに私自身とても共感します。

新しいケアの文化と呼ぶべきものが広がりつつあると思います。傾聴や寄り添いという言葉で代表されるように、そこでは自分をいったんカッコの中に入れて、人の話を理解しようとします。そのことが自分の生の充実にもつながる。それは、自分中心の世界を超えた世界に触れて出て行くという、充実感のようなものではないでしょうか。

地縁や血縁、宗教との関わりが薄れた現代の人々も、ケアしケアされる関係を求めています。人の死に際しても、死者をしのび、自分たちの生きがいを確認め合い、痛みを共にする。そんな深い体験が人生では大切なのです。東日本大震災の後は、継続的に東北に行き、少人数の集まりに出ました。また、被災地や地域社会などで心のケアを担当する臨床教師の育成に、最前線に関わりもしました。

若い人の死生観の変化を感じるという。

私が若い頃は自分が死ぬことをめぐって話をしたり、それが学問の素材になったり、新聞や雑誌が取り上げたりすることはありませんでした。今は若い人が日常的に死を話題にします。すいぶん変わったなと思います。

背景にあるのは孤独です。しかも切迫度や緊急性の度合いが今の若い人は高い。死別などの喪失は年寄りの話ではなく、若い人もいつ孤独になるかわからない。あるいは既に孤独。大都市は孤独を育てる場所です。人とのつながりは薄くなる。近しい関係は大事だが、それも細くて危うい。私の学生時代は民俗学や文化人類学に希望があり、人気でしたが、今は宗教学や死生学など、人間の内面に迫る、救いを考える学問をやりたい若者が増えています。



大きな枠の議論を意識したいという

最近是国家神道の研究に重点を置いている。

近代から現代の新宗教をひとつひとつ研究し、そのベースにある精神的な体験にも自分なり

の理解を深めてきました。個別の宗教の窓から全体を見通そうとしてきたのですが、年齢がいくにつれ日本の宗教文化の全体を説明する大きな絵が必要ではないかと考えるようになりました。

西洋の宗教がキリスト教の大きな枠組みのなかにあるように、日本の宗教は国家神道の枠組みの中にあります。明治維新のときに、古代からあるものを踏まえて天皇中心の国家体制という新しい伝統をつくり、1945年の第2次世界大戦の敗戦まで続きました。それは明らかに宗教的な精神文化の流れをなしているわけで、私は国家神道と呼ぶべきだと考えています。

50代に入った2000年ごろから始め、10年かけて1冊本を書き、ここ数年でまた2冊、本を出しました。それでもまだわかりにくいところがあるので、もう一段、深めたい。国家神道のありようを明らかにしないと、日本の、特に近代以降の精神史は見えてこないと思うからです。

政治体制にも考察は及ぶ。

ヨーロッパは聖と俗が分かれています。つまり国家は世俗のもの、宗教は神聖なものと分離されています。これは世界を見渡すと珍しいことで、東アジアの中国や日本では国家は神聖なものとして位置付けられてきました。国家に宗教性がくっついています。

中国の共産党支配とは何かと考えると、それは儒教の官僚支配があったところに、共産党の官僚支配が置き換わったものです。中国には国家支配のために、共通の理念で団結するという強力な伝統があります。日本の体制は中国流から派生し、特に近代は中国以上に強力に国をまとめる体制をつくってきました。

国家神道による国の支配は敗戦で途絶しましたが、戦後も尾を引かなかったわけではありません。最近でも、中国が強力になってくると、反発するように政治の側で、国家神道に傾く動きが起きます。中国に対抗して政治が強権化するのには、日本の政治文化に今も伏在している危うい可能性だと思います。

70代に入りこれからの仕事をどう構想しているか。

もう学会に出ると迷惑がられる年齢なので、若い頃に手を付けたいいろいろなことを、今の目で見てどうなのか、一つ一つ整理をつける仕事をするつもりです。大学院の修士論文で取り組んだ折口信夫を改めて捉え直すとか、死生学では、小林一茶や宮沢賢治についても書いてみたい。

地に足の着いた学問ということとも関係して、これまでは個別の事例に入り込んでディテールを報告する、知識的なことに重点を置いてきたのですが、だんだん細かなことを忘れていくし、大学を離れて新しい知識を得にくくなるなかで、大きな枠の議論ができたらと思っています。

大きな物語の終焉（しゅうえん）というポストモダンの意識から、全体をとらえる大きな枠の議論は今のアカデミズムの若い人達には人気がありません。それで実証主義に傾くのですが、やはり大きな枠組みで理解し、説明しないと見えてこないものがあるのではないのでしょうか。

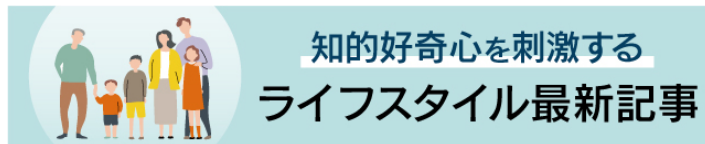
国家神道の議論に若い研究者がついてこない感じがあるのも、一つには大卒の議論の人気のなさがあるようです。昔、外国の研究者に言われたのですが、日本はどこか自由にものが言えないところがある。そのへんも関係していないか、気がかりです。

それから、宗教とはつまるところ何かという問題にもまだ納得いく答えを出せていない。死ぬまで分からない気もするのですが、世界でもあまり言われていない私なりの説がないでもない。いまさら英語で書くのはたいへんなのでせめて日本の読者にはわかるような本も書いてみたい。なぜ救いが必要なのかを掘り下げたいと思っています。

(編集委員 深田武志)

すべての記事が読み放題
まずは無料体験(初回1カ月)

有料購読のお申し込み



保存



人間発見

フォローする

人生哲学や仕事観、生き立ちなどを経営者や科学者、政治家など様々な分野の人に聞くコラム「人間発見」の記事サイトです。1995年から続く日経の名物連載です。

- ・ [人の心が動かす社会 地に足をつけ日本の精神史たどる](#) (5:00)
- ・ [植田和男さん、バブル期に「株価高すぎる」と警鐘](#) (13日)

関連トピック

トピックをフォローすると、新着情報のチェックやまとめ読みがしやすくなります。

[生活](#)

こちらもおすすめ(自動検索)